

令和8年度 教育行政執行方針

掲載の教育行政執行方針は広報用に編集しています。原文は町ホームページまたは役場2階教育委員会（14番窓口）、庶路支所で見ることができます。



川島眞澄教育長が令和8年第1回白糠町議会定例会において、教育行政執行方針を述べました。

1 はじめに

世界各地で続く紛争や、激甚化する自然災害など、社会を取り巻く環境は依然として混迷を深めています。こうした予測困難な時代にあつて、昨年開催された大阪・関西万博は、世界中の知恵を結集した「いのち輝く未来社会」の在り方を示し、次代を担う子どもたちにとって未来を切り拓く大きな希望となりました。また、先般のミラノ・コルティナ冬季五輪における道産子アスリートの躍動は、私たちに深い感動と勇気を与えました。

我が町に目を向けましても、こうした時代の潮流を確かな成長へとつなげようとする子どもたちの姿があります。GIGAスクール第2期の新端末を手に、他者と情報を共有し試行錯誤を繰り返す意欲的な姿。そして、スポーツや文化活動において、ふるさと白糠の誇りを胸に全道・全国の強豪と互角に渡り合い、ひたむきに躍動するその姿は、町民の皆さまに大きな感動と勇気を与えています。一方、国においては、第4期教

育振興基本計画の中盤を迎え、ウエルビーイングの向上に向けた取り組みが加速するとともに「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が、実践の段階から「質の高度化」の段階へと移行しつつあります。このような時代だからこそ、今、教育に求められるのは、本町の「ふるさと教育」を基軸に、自律的に学び、変化を恐れず未来を切り拓く力を育むことです。

その際「ふるさと教育」の行動目標である

- ・心の角度を変えてまちを見つめ直せる人
- ・他人のために汗を流せる人
- ・足元の材料を耕し直せる人

この3つの人間像を追求し続けながらも、時代の要請に応えるべく教育のアップデートを図る必要があると考えています。

よつて、令和8年度は、これまでの積み上げを確かな実践へとつなげる視点を重視した中で、学習指導要領の趣旨を教育現場で着実に具現化し、目の前の子どもたちが未来を自ら切り拓く創り手となるよう、実効性の高い教育活動を組織的に推進することが重要で

あると考えています。

学校教育におきましては、GIGAスクール構想に基づく1人1台端末の日常的な活用や、義務教育9年間を見通した小中一貫教育の推進により、児童生徒の学習に対する意欲や関心には一定の改善が見られるものの、これからの予測困難な未来を切り拓くために求められる、自ら課題を見出し解決に向けて粘り強く取り組む「探究の質」のさらなる向上や、多様な他者と協働して新たな価値を創造する力の育成については、依然として課題も見受けられます。



国のGIGAスクール構想は、1人1台端末等の活用により教育の質を向上し、全ての子どもたちの可能性を引き出す教育の実現を目指しています。

本年度は、これらの課題解決に向け、これまでの取り組みを「種まき」から「発芽・開花」へと高める重要な1年と位置付けています。

特に、体系化を図った環境教育の実践をはじめとする特色ある教育活動の取り組みなど、これまでの教育活動を実現・定着させ、具体的な成果として町民の皆さまにお示しできるように、教育の質の向上に全力で取り組んでいきます。また、社会教育では、「第10次白糠町社会教育中期計画」に基づき、生涯を通して心豊かで充実した人生を送ることができるよう、社会情勢や環境の変化に対応した多様な学びや文化芸術・スポーツに触れる機会を提供するほか、町民の皆さまが郷土への愛着や誇りを自覚できるように、誰もが主体的に学び、交流し、地域で支え合う環境づくりに向けた取り組みを進めていきます。

私たち教育委員会は、恵まれた自然環境、産業、文化などを融合した「白糠町だからできる白糠町らしい教育」を大切にし、子どもたちが誇りを持って世界へ羽ばたけるよう全力を尽くします。

2 学校教育の充実

1 実社会で生きる実践的な力の育成

子どもたちが未来を自らの手でデザインできるように、以下の3点を重点施策として展開してまいります。

1つ目は「自律的な学習者の育成と学びのサイクルの確立」です。予測困難な未来社会を生き抜くためには、子どもたちが受動的に知識を得るのではなく、自ら学びに向かう姿勢を確立することが不可欠です。そのため、「小中一貫教育」の推進により義務教育9年間を見通した学習規律や、学習スタンダードの定着を図るとともに、これまでの授業改善をさらに推し進めます。具体的には、子ども自身が単元の学習の見通しや目標を持ち、進捗を振り返り、その結果を次の学びに生かす「自己調整学習」のサイクルを定着させていきます。ICT端末については、単なる操作習熟やドリル活用の段階を脱し、情報を収集・分析し、他者と考えを共有・協働して新たな解を導き

出すための「思考の文房具」として、日常的な活用度を高めていきます。併せて、家庭学習の習慣化を支援するため、放課後学習や長期休業中のサポート体制を充実させていきます。最終的には個々のつまづきに対するきめ細かな指導による基礎学力の底上げと、自ら机に向かう自律的な学習習慣の定着を両輪で進め、確かな学力を保障してまいります。

2つ目は「校種をつなぐ環境教育とふるさと教育の体系化」です。本町独自の教育資源である5つのフィールド（農・林・水産・再生可能エネルギー・アイヌ文化）を活用した環境教育を、こども園から高校までの18年間を通して、一貫した「ふるさとキャリア教育」としてカリキュラムの体系化を図ってまいります。その重要な基盤として、幼児教育と学校教育の連携に関わる「アプローチャリキュラム」と「スタートカリキュラム」の融和を通して、遊びから学びへのスムーズな移行と滑らかな接続を図ります。これにより、義務教育入学初期の学校生活への適応を促し、学びへの安心感を醸成します。各段階においては、地域の豊

かな自然や産業を教材とした発達段階に応じた探究活動を展開してまいります。こうした学びを通じて生まれ育った地域への深い愛着と誇りを育むとともに、将来、どのような場所においても、自らの足元を見つめ、地域社会の発展に貢献しようとする意欲あふれる人材を育成してまいります。



環境教育では、環境問題を総合的に理解し、環境への責任ある行動をとることができる、グローバルな視野を持つ人材の育成を目指します。